展覧会「森の夢／記憶の森へ」 作品紹介

展覧会「森の夢／記憶の森へ」は、2006 年8月から9月にかけ、青森市の「国際芸術センター青森」において「夏のアートフェスティバル 2006」の一環として開催された。

■「Hoichi －芳一－」

1987 年発表の「芳一 －物語と研究」を原型とし、青森の土地から受けたイメージをもとに、新たな部分を付け加えて再構成した迷路状のインスタレーション。50m にわたって緩やかな弧を描くギャラリーA の導入部に設置。

■作品「Depth －深度－」

「Hoichi」の後半部のイメージを受けて、地層に眠る者への意識、下方へと向かう身体を暗示する。上下移動を繰り返すビデオカメラ装置によるメディア・インスタレーション。

■「Breathing －呼吸法－ 」

1998 年以降の「呼吸法」シリーズの一つの装置（テーブル）をもとに、展示空間に合わせて再構成したメディア・インスタレーション。

■「Pendulum －振り子－」

約 10m 四方のギャラリーB に設置。1995 年発表の「Pendulum」を原型とし、モチーフの卒業写真を廃校となった青森市内の小学校のものに替えて再構成。

縄文の遺跡を地層に含む青森という土地、また森に包まれたセンターの特異な空間との関わりの中で、これらの作品は、物語、記憶や夢、生命の循環をテーマに互いに干渉しあい、新たな作品として再生することになる。

会期中、展示関連企画として以下のワークショップ、レクチャーが開催された。

・「森の夢 －アニメーションワークショップ」 2006 年9月 2 日

・「記憶の森へ」レクチャー …吉岡洋氏との対談 2006 年9月 3 日

「Hoich　-芳一」

この作品の原型となる「芳一 -物語と研究-」(1987)は、小泉八雲の怪談「耳なし芳一」をプレテキストとし、鏡面パネルの並列する前半部と渦巻き状の屏風からなる後半部からなるインスタレーションである。屏風の外側は芳一を呼びかける声が、また内部全面には般若心経が書かれている。

芳一は目の見えない琵琶の名手である。壇ノ浦の合戦で滅亡した平家一門の霊が、琵琶の語りを聞くために、芳一を毎夜訪れる。亡霊から芳一の身を守るため、肌に魔除けとして般若心経が書き込まれ、亡霊には芳一の姿が見えなくなる。

この作品では、芳一の姿を探し求める亡霊を壇ノ浦で安徳天皇をその胸に抱き入水して果てた「二位の尼」に設定している。亡霊である彼女は自分達の物語を「語って欲しい、謡って欲しい」と芳一に呼びかける。誰かに物語を語られることで自分が存在できる。「誰かに謡われることがなければ、自分たちは亡霊ですらない」と彼女は語る。立ち並ぶ鏡は彼女自らの姿を映し出すことはなく、声だけが鏡面上に残されている。そこに芳一がいるに違いないという思いだけが、芳一の身体を巡る彼女の歩みを促していく。観客は、この亡霊の姿を自分の姿に重ねて作品を巡り、鏡を抜け、屏風の外周を巡り、その中へと入ることになる。

今回の作品「Hoich」では、この国際芸術センターのある青森から受けたイメージによって、新たに第三部ともいえる部分を付け加えている。それは、同じような渦巻き状の形態をとりながらも、少しずつほぐれ、地面に沈んでいく屏風群である。屏風の表には、青森の等高線からのイメージを背景に「語らなくていい」という声が書かれている。

「語って欲しい」という亡霊の声から一転して、「語らなくていい」という声が主旋律となる。そこでは青森に残る「おやす」伝説や地層に眠る縄文の遺構などからモチーフを得て、「語られないもの」への価値や、それへの思いが暗示される。

「Depth -深度-」

「Depth　-深度-」は、今回新たに制作されたインスタレーション(装置)である。

この装置は、「反復する動きの中で、下降のイメージを生み出す」ことをめざして制作された。地面の下方、そこには土の下に眠る歴史の層があり、森を支える網目状の根があり、様々な微生物や細菌が蠢いている。それは「語られないもの」への視線と言えるかもしれな

い。

上下昇降装置に取り付けられたカメラによって、手前に設置された梯子が壁面状に投影される。カメラは上下の動きを反復するのだが、投影された梯子は上昇し続け、それを見る観客は逆に下方に降下する感覚を味わうことになる。繰り返しの中、リアルタイムの映像に、別の空間の映像が挟み込まれ、重なり合う。

鼓動という繰り返し、呼吸という繰り返し、昼と夜による日常の繰り返し、時間に限界づけられた反復構造の中にしか生存がないとしても、その反復は決して閉じられてはいない。そんなことを思い描こうとしたのだろうか。

「Breathing －呼吸法－」

繰り返される呼吸から、人だけではない、無数の生命の響きを聴き取ること。あるいは反復の動き、映像や音から、たとえそれが無機的なものであろうと、そこから生命的な印象を受け取ることができるということ。そのような人の持って生まれた感覚の中に、人が自分だけではなく、他者が生きていることを了解するための仕掛けが隠されているような気がする。

1995 年から始まる「呼吸法」シリーズには、そのようなテーマのもとに制作された、実際に空気圧を体感したり、空気圧で動作したりする幾つかの装置がある。今回の作品「Breathing －呼吸法－」のテーブル状の装置は、その一つである。金剛界曼荼羅は世界の変容過程を表している。その曼荼羅を抽象化した画像が投影されるテーブル、その上に手をかざすと下方から空気が掌にあたる、と同時に画像が変化し始める。最初のフェーズでは9つに分たれた画像の一部が変化し、次のフェーズでは全体が変化する。最後のフェーズでは風に揺れる稲穂や葉、水面の映像が重なる。また、今回の展示では映像が床面にも投影された。

「Pendulum －振り子－」

振り子は往復運動を繰り返す。振り子の運動は時計の針を前に進めるが、その往復運動自体は、過去や未来の方向を指し示すことはない。振り子時計を眺めていると、針がカチリと前に進む瞬間と次に針が進む瞬間の間に時間は逆に流れていたかもしれない、とふと思

う時がある。

作品「Pendulum －振り子－」では、モニター内で映像の振り子が揺れている。室内中央の鉄製の椅子に観客が座ると、卒業写真のスライド映像が壁面に映し出される。振り子の運動に合わせて時間を遡るかのように、卒業写真は1年ごとに過去に遡って投影される。2002年から 1928 年まで、70 年間、90 数枚の卒業写真が順に映し出されていく。ゆっくりとした写真の逆転再生。カラー写真から、モノクロ写真へ、褪色したセピア調の写真へ。笑いながらピースする子供達から、居住まいを正しこちらを凝視する子供達へ。私服から制服、そして着物へ。運動靴から革靴へ、そして下駄や草履へ。新しい校舎から木造の校舎へ。それは、2003 年に廃校となった小学校の記憶であり、卒業時という切断面で子供達が抱いたに違いない多くの夢の記憶でもある。そして写真を見る観客誰もが、自分の記憶を遡っていることに気づき始める。